

ダ・ヴィンチ 衝撃の未完作

「見てしまった」。衝撃を言葉にすればこれに尽きる。レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452～1519年）の「ほつれ髪の女」を目にした瞬間から、彼女のまぶたの辺りに宿る光が生々しく残り、印象は薄れるどころか日に日に増す。大芸術家の手になるとはいえ500年以上も前の小さなデッサン（縦24・7センチ、横21センチ）に、なぜこれほどの力があるのか。私は謎を追わずにはいられなくなった。

【藤原章生】

に説明してほしくなった。

3人の学者に話を聞いた末、ナポリ大のカルロ・ベッチェ教授(52)にローマのカフェで向かい合った。「彼女が今も生きているような気がします」と感想を伝えると、「それは美に当を得た反応です」との答えが返ってきた。

「『ほつれ髪』は1506～08年ごろ、つまりレオナルドが死ぬ10年ほど前、50代後半のデッサンで、当時彼が探し求めている『一瞬の生の動き』を描いたものです。陰影を強調することで彼女が木板

作品は今年1月、イタリア北部のパルマ国立美術館で初めて目にした。東京・渋谷のBunkamuraで開かれる「レオナルド・ダ・ヴィンチ 美の理想」東京展（6月10日まで）に出品されるのに先立ち、関係者から話を聞くためだった。その時のインタビュ―記事は2月14日付本紙朝刊に掲載された。

本来なら仕事はそこまでだった。だが、彼女の表情、特に左まぶたの微細なしわ、まっつけ、目の陰影が記憶に焼きついて離れず、理由を誰か



レオナルド・ダ・ヴィンチ 「ほつれ髪の女」
1506～08年ごろ パルマ国立美術館蔵

顔は絵画 髪はデッサン
性超え輝いた

特集ワイド

から飛び出してくるような印象を見る者に与える、今で言う3Dの先駆けと言える作品です。ルネサンス時代の他の画家も同じ技法を使ったが、レオナルドの技は傑出してゐる。おでこや目の下の光り輝く部分を彼は白鉛で輝かせ、彼女を絵の外へと解き放った。この点で言えば『モナ・リザ』をしのぐ鮮明さ、完成度と言えます」

教授は「一瞬の生」という言葉を使った。何を意味するのだろうか。

「現代なら『老年』にあたるレオナルドが目指したのは、絵を通して命をつかみ取ることでした。彼が描いた他の女性の肖像画には、これほ



「ほつれ髪」を語るベッチェ教授＝ローマで、藤原撮影

未完作はやはり不完全なものということで、「ほつれ髪」を巡る学会での未完論争は現在も続いている。

その話をベッチェ教授にぶつけると、「未完であることこそ、レオナルドの神髄がある」と言う。

「『ほつれ髪』は全く違う

く見てしまいがちだが、「レオナルド自身は絵よりもデザインを好んだ」というのが教授の見方だ。彼はデッサン、絵画の両方で並外れた才を発揮したが、絵の方はルネサンスの規範に従い完璧であることに到達点とした。一方、未完に終わることの多かったデッ

ナ・リザの3D先駆け

ほつれ髪

どの動きはない。『ほつれ髪』はまるで写真のように生命の瞬間をつかみ取っている。うつむいた顔と、風になびくような髪の動き……同時代の芸術家たち、ラファエロもペルジーノもミケランジェロも達成できなかった試みです」

「興味深い作品ではあるが未完である。このデッサンだけでは、完璧さを求めたレオナルドの意図を完全にうかがい知ることができない」(ローマ美術学院のロベルトマリ・アシエナ教授)との声もある



レオナルド周辺の画家「レダと白鳥」16世紀 ローマ、ボルゲーゼ美術館蔵©Alinari.Licensed by AMF.Tokyo/DNP.com

二つの部分で成り立っている。まるで別人のもののような、顔とその髪です。顔の細部の完璧さはモナ・リザの特有をよく表している。顔を描くにおそらく数カ月かかり、さらにその後、何年もかけて細部を細かな絵筆で完成させたはず。一方、髪の部分には太い絵筆による素早い動きで、それぞれ一筆で描きあげたものでしょう。要した時間は数分間。つまり顔の部分は絵画だが、髪はデッサンだということ。デッサンと聞くと、下絵、習作という印象でちょっと低

サンから見えるのは、画家であり同時に科学者だった彼の視線です。常に自然を研究し続けた彼には、科学がそうであるように、全ての現象を解く答えなどあり得なかった。だから、さまざまな可能性を残す形で、あえてデッサンを未完で終わらせたのです」

3月、消失したとみられていた「アンギアリーの戦い」がフィレンツェの壁画の裏にあることが長い研究の末、ほぼ確実となった。「アンギアリー」は当時の内乱をリアルに描いたものだ。「彼は男たちの顔に表れる一瞬の残忍さを描くことで、生と死の根源をとらえ、むき出しの暴力を探究した。同時代のこの作品にも、人の表情の『瞬間』に『永遠』を見ようとした『ほつれ髪』に通じる狙いがある」と教授は言う。

の肩の辺りにエロチックなものを感じてしまうのは私だけだろうか。そう聞くと、教授は「私も全く同じ」と応じた。「未完の作品は空白部分をファンタジー想像へ解き放つ。鑑賞者に見えないものまで見せてしまうということです。私が『ほつれ髪』を見て思い浮かべるのは彼女の裸。その想像上の裸体は現実よりも美しく、実はそこが、絵の最も美しい点だという解釈を、私は最近、イスラエルと米国の学会で発表しました」

ならば、レオナルドは「一瞬の生」を通して女性のエロスを描こうとしたのか。「いや、そのエロスは女性だけのものではないはず。レオナルドが同性愛者だったのはほぼ間違いないが、私が著書で強調してきたのは彼がトランスセクシュアル、つまり男と女という垣根を乗り越えようとしていたことです。その根拠として教授は一枚の絵を挙げた。「レダと白鳥」。レオナルドが描いた原画は失われたが、同時代の画家らが模写した作品が残る。「『ほつれ髪』は女神レダの下絵である可能性が高いのですが、『レダ』の元となったデッサンには、野性美あふれる人物がリアルに描かれており、哲学的、精神的な面で男女いずれをも象徴していると私はみています」

「モナ・リザ」はレオナルド自身の自画像という説があるが、ベッチェ教授は「ほつれ髪」にも通じると言う。「いずれも女性像のなかに自分自身を少しばかり入れている。それが彼の魂のセクシュアリティだった。彼は『ほつれ髪』を描くことで、そこに到達した。老いたことで、芸術制作の一つの段階を超えたとも言えるのです」

「見てしまった」という印象は、男女の分け隔て、あらゆる「常識」を超えようとする芸術家の性的な面をかいま見たせいなのかもしれない。

「特集ワイド」へ ご意見、ご感想を t.yukan@mainichi.co.jp ファクス03-3212-0279

